『表現文化』創刊に寄せて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学研究科表現文化学教室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 康生 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学, 関西外国語大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006471

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	『表現文化』創刊に寄せて
Author	藤井, 康生
Citation	表現文化. 1 巻, p.7-8.
Issue Date	2006-03
ISSN	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学研究科表現文化学教室
Description	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

『表現文化』創刊に寄せて

藤井康生

フランスを例にとると、17 世紀は演劇の時代、18 世紀は哲学の時代、19 世紀は小説の時代という具合に分類できるが（多少の時期的なずれはあるにせよ、ヨーロッパの文化史の流れは他の国でも多かれ少なかれ同様であろう）、20 世紀はどのように名付けたらよいのだろう。あえて言えば、映画の時代、あるいはテレビも含めて映像の時代というのが妥当だろう。しかし、20 世紀後半の演劇の氾濫を考えると、スペクタクルの時代というのが相応しいかも知れない。しかも、その演劇はとくにフランスにおいては 17 世紀から主流を成してきた〈言葉〉中心の古典主義演劇を批判し、それと対立していた〈視覚〉を重視するバロック演劇の復権と連動していたことを思えば、その背後に 19 世紀までに確立された文字文化、すなわち文学の衰退があることは否めない。

従来、文学部の学問は哲学・歴史・文学の三つに分類する慣わしがあって、しかも文学部の〈文学〉とはフランス語の *lettres*、英語の *letters* の訳語だから、文学部というのはもともと文字で書かれた資料を研究するところであって、文学部の三つの学科に共通する方法論が文献学に偏っていたのも当然であろう。しかし、哲学も歴史も文学も、現代に訴える生きた知の文化の側面も持つところから、文献学とは異なる新しい方法論が模索されてきた。筆者が主に関わってきた文学研究を例にとれば、英文学、独文学、仏文学、中国文学、国文学など、従来、国ごとの文献学が中心であったが、それは大学が 19 世紀以後のナショナリズムと平行して発展してきたことと無関係ではないだろう。文学研究に限らず文学部の学問体系は、方法論だけでなく制度においても、多かれ少なかれ 19 世紀的なものに支配されてきたのである。

激動の 20 世紀が終わって、大学も厳しい冬の時代を迎えつつあるとき、21 世紀にふさわしい学問体系と制度を新たに構築する時がやってきた。人類の文化遺産としての〈文字文化〉の研究は維持されねばならないが、文字ではカヴァーできない表現手段である身体・イメージ・映像の文化的側面が注目され出したのである。

思えば、身体とかイメージは、人類の最も原初的な表現手段であった。文字に重点をおく近代の学問体系が、そうした原初的なものを軽蔑し、背後に追いやってきたのである。本来、身体・イメージ・文字は一体となって文化体系を築いてきたことを思えば、身体やイメージの研究は文学部において文献学を補完する有力な学問体系になるだろう。数年前に大阪市大の文学部に発足した表現文化という専攻は、前述のような経緯を持つ必然的な学問体系として誕生したものと思われる。このたびは研究誌が創刊されることになり、専攻の創設に関係した者として喜びに耐えない。